

第三節 特別講座・公開講座ほか

本節は大学が行ってきた特別講座、公開講座、各種講習会を取り上げる。

大学は昭和二十五年頃から公開講座の名称を用いて学生のための講座を多数開いてきたが、昭和五十七年の「公開講座規則」の制定にともない、毎年夏に東京芸術大学公開講座が実施されることとなった。これを機に、講座の名称が、一般に向けて行うものを公開講座、学内の学生に向けて行うものを特別講座と使い分けられるようになった（昭和五十八年一月六日『教授会議事録』による）。

したがって本節では、「公開講座規則」制定以前の学内向けの講座は特別講座として扱う。

特別講座

学内の資料では、ラザール・レヴィ特別公開ピアノ講座の後援として東京芸術大学の音楽学部が名を連ねたという資料が、特別講座の最初の記録である。以下「教授会議事録」をもとに、昭和五十八年以前公開講座の名称で行われていたものを含め、学内の資料から確認された特別講座を一覧にまとめる。

日付	分野または題目	招聘講師
S 29・4	ヴァイオリン	ヨーゼフ・シゲティ
S 25・10・23	ピアノ	ラザール・レヴィ

S 29・5・20	ピアノ	ウィルヘルム・バックハウス
S 29・10・21	「公開発声講座」	アリゴ・ポーラ
S 30・6・2	ハーブシコード	ハリヒ・シュナイダー
S 32・6・25	テナー	リチャード・タツカー
S 32・6・25	「オペラ歌手の養成について」	アーウィン・ジョスベ（リリックオペラ劇場）
S 32・11・5	ピアノ	エミール・ギレリス
S 33・6・19	声楽	ローランド・セッシ
S 34・1・14	オペラ	アンナ・ルートヴィヒ
S 34・4・20	「オペラ演出について」	ヨーゼフ・ヴィット（ウィーン国立歌劇場）
S 35・5・16	室内楽	チェコ・トリオ
S 37・1・13	オーケストラ	ヒュッター
S 37・1・16	弦楽オーケストラ	ガブリエル・ブイヨン
S 37・2・3		アロン・コーブランド
S 37・6・15	ピアノ	シドニー・フォスター
S 38・9・13	ヴィオラ	ワルター・トランプラー
S 38・2211・2821	ソルフェージュ	ジュドンネ
S 45・1211・229	ヴィオラ	ウィリアム・プリムローズ
S 46・5・18	作曲	イヴ・クライエ
S 46・5・18	オルガン	ガルシア・ヨベラ
S 46・6・10	チェロ	堤剛

S 49・6・18	「東欧音楽教育について」	広瀬 鉄雄
S 49・6・12	「大学オーケストラ・学生オーケストラ指導」	コシユラー
S 49・5・28	「オルガン演奏法」	ハネス・ケストナー
S 49・5・22	「管打合奏法」	W・フランシス・マクベス
S 49・5・21	「ガムラン演奏法」	シンディ・ベント
S 49・5・7	「オルガン奏法」	ピエール・コシユロ
S 49・5・7	「トランペット奏法」	ロジェ・デトモルト
S 49・4・25	「尺八音楽について」	青木 静夫 ほか
S 46・12・3	ピアノ	ゲーブ・ハルト
S 46・11・29	ヴィオラ	ウィリアム・プリムローズ
S 46・11・22	コントラバス	コンラード・ジーバツハ
S 46・11・15	オペラ	ヤン・ポツパー
S 46・11・11	サククス	ジェームス・ホーリック
S 46・11・8	コントラバス	コンラード・ジーバツハ
S 46・10・30	オルガン	ピエール・コシユロ
S 46・10・29	ピアノ	アナ・エウヘニア・ゴンザレス・ガーヨ
S 46・10・27	指揮	セルジュ・フルニエ
S 46・10・14	オーボエ	ルネ・ウールトフー
S 46・8・4	オペラ	ゲルハルト・ヒュツシュ
S 46・7・8	ヴィオラ	シュトレング
S 46・6・10	バスーン	中川 良平

S 50・7・2	チェロ	堤 剛
S 50・6・25	一中節	小林 清子
S 50・6・3	教育実習	今井哲夫（東京都教育委員会指導主事）
S 50・5・29	ヴァイオリン	パイヤール室内管弦楽団
S 50・5・26	アンサンブルとハープ	バイエルン放送交響楽団
S 50・5・22	クラリネット	ギ・ドゥブリュ
S 50・5・13	ピアノレッシン	ウ克蘭
S 50・5・9	室内楽	バルトック四重奏団
S 49・12・2	「能・狂言について」	野村 萬作 ほか
S 49・11・8	「サクソフォン奏法」	ダニエル・デファイア
S 49・10・31	「ホールの室内音響」	山本照二（NHK）
S 49・10・31	「室内楽」	ウィーン・クワルテット
S 49・10・19	「クラリネット奏法」	アルフレッド・ブッシュ（ウィーン国立歌劇場）
S 49・10・15	「舞台扮装術」	杉山 徳子 ほか
S 49・10・14	「ヴァイオリンのレッシン」	ヨゼフ・スーク
S 49・10・11	「ヨーロッパのオペラ事情」	リッダーブシュ ほか
S 49・10・8	「比較音楽と民族音楽」	R・ギュンター
S 49・9・21	「地歌音楽について」	富山 清琴
S 49・6・28	「教育実習について」	今井 哲夫

S 51・4・28	「管打合奏の指導」	ロジェ・ブートリール（パリ音楽院教授・ギャルド吹奏楽団指揮者）
S 51・4・16	「チェロ奏法について」	ダニール・シヤフラン
S 51・2・16	「ヴィオラ奏法について」	ヴルノ・ジュランナ（デトモルト音楽大学教授）
S 51・1・29	「コントラバス奏法について」	アレキサンダー・ミフノフ（モスクワ・フィルハーモニー奏者）
S 50・12・18	「朗読法演習」	ミヒヤエル・ミュンツァ
S 50・12・12	「ヴァイオリン」	ガブリエル・ヴィヨン
S 50・12・12	「ピアノ」	P・シヨイモーシュ
S 50・11・18	「インドネシアの音楽と舞踏」	ティム・カントリ他
S 50・11・11	「三味線音楽」	高木浩志 井上一雄
S 50・11・7	「バッハの平均率」	エディット・ピヒトリ・アクセンフェルト（フランクフルト・ホッホシューレ教授）
S 50・10・30	「ピアノ」	ケンダル・テイラー（イギリスロイヤル・アカデミー）
S 50・10・28	「イタリアの音楽曲について」	ジュゼッペ・ディ・ステファノ
S 50・10・18	学生オーケストラ	コシユラー
S 50・9・27	メイクアップ衣装	中村たつ ほか
S 50・9・18	サクソフォン	ジャン・マリ・ロンデックス（ボルドー音楽院教授）

S 51・10・19	「北欧の現代音楽」	
S 51・10・19	「南インド音楽の理論とヴァイナ演奏」	ナゲシュウワラ・ラオ（カタルーナ音楽院教授）
S 51・10・15	「バッハ無伴奏ソナタ及びバルティータ」	W・ミュラー
S 51・10・15	「イタリアのチェンバロ音楽について」	L・タリャヴィーニ（ボローニャ音楽アカデミー教授）
S 51・10・14	「ヴィオラと室内楽」	ルドルフ・シュートレング（ウィーンフィルハーモニーヴィオラ奏者）
S 51・10・14	「バッハ無伴奏ソナタ及びバルティータ」	W・ミュラー
S 51・9・13	「指揮について」	フランコ・フェラーラ
S 51・6・9	「ウィンド・アンサンブルについて」	ドナルド・ハンスバーク
S 51・6・8	「声楽公開講座」	ハンズ・ヨアヒム・ハインツ（ジュリアード音楽院教授）
S 51・6・1	「クラリネット基礎指導」	ジャック・ランスロ
S 51・5・17	「十八世紀のドイツのオルガン・コラールとフアンタジー」	ヒュー・マッククリン（西オントリオ大学教授）
S 51・5・6	オルガン	デリー・マーケル
S 51・5・1	「学生オーケストラの指導」	ロジェ・ブートリール（パリコンセルヴァトワール教授・ギャルド吹奏楽団指揮者）

S 52・10・14	S 52・10・11	S 52・9・14	S 52・7・7	S 52・6・9	S 52・6・7	S 52・5・10	S 51・12・6	S 51・11・25	S 51・11・20	S 51・11・15	S 51・10・25	S 51・10・25
「ロマン派の音楽について」	「イギリスオルガン曲について」	「室内楽（弦楽四重奏）について」	「サクソフォーン奏法について」	「バイオリン奏法について（スペインの曲を含む）」	「現代の弦楽四重奏曲について」	「バッハのバルティータについて（第二番を中心に）」	「コントラバス」	「室内楽演奏の実技と講義」	「ワールドの演奏とアラブ伝統音楽について」	「室内楽演奏の実技と講義」	「メイクアップ法実技及び舞台装飾術」	「声乐 ヴェルディ、ベッリーニ歌曲の歌唱について」
クラウス・シルデ（ベルリン国立音楽大学）	ピーター・ハーフォード（ロンドン王立音楽院）	リツカルド・ブレングーラ（サンタ・チェチリア音楽アカデミー）	ダニエル・デファイアー（パリ音楽院）	ヴィクトール・マルティン（トロント大学）	コンテンポラリー・アート・クワルテット	エディット・ピヒト・アクセンフェルト（フライブルク・ホッホシューレ）	フランティシエック・ポシュタ（プラハ音楽院教授）	アルベルト・ヘニゲ	ムニール・バシール（イラク情報省 美術顧問）	アルベルト・ヘニゲ	中村たつ・原田清人（俳優座）	ジヨルジョ・ファヴァレツト（サンタ・チェチリア音楽院教授）



エッダー・モーザー（中央）の特別講座
昭和52年11月22日。左：畑中良輔本学教授（当時）、右：原田茂生助教授（同）

S 52・11・22	S 52・11・18	S 52・11・16	S 52・11・11	S 52・11・4	S 52・10・21	S 52・10・17
声楽	「トロンボーン奏法・金管全般の合奏について」	「打楽器奏法・打楽器合奏音楽について」	「オラトリオ及びドイツ歌曲の解釈表現法」	「オーボエ奏法 及びバロック音楽の演奏」	「様式と技術について」	「メイクアップ法実技及び舞台装飾術」
エッダ・モーザー（ドイツ生、オーストリアの名ソプラノ）	ヨハン・ドムス（ベルリン・フィルハーモニー奏者）	ベルナー・テリヘン（ベルリン音楽大学教授、ベルリン・フィルハーモニー奏者）	ユトウツトガルト音楽大学）	ユルク・シェフトライン（元ウィーン・アカデミー教授）	ルヴァトワール（パリ コンセ	青山まり子・松野健一（俳優座）

S 53 ・ 5 ・ 25	S 53 ・ 5 ・ 16	S 53 ・ 5 ・ 8	S 53 ・ 4 ・ 19	S 53 ・ 4 ・ 17	S 53 ・ 4 ・ 14	S 53 ・ 2 ・ 16	S 53 ・ 2 ・ 14	S 53 ・ 1 ・ 29	S 53 ・ 1 ・ 26	S 53 ・ 1 ・ 25	S 52 ・ 12 ・ 9	S 52 ・ 12 ・ 5	S 52 ・ 11 ・ 25
「ベートーヴェンの後期ピアノソナタについて」	「幼児教育の当面する諸問題」	「ヴァイオリン奏法」	「トロンボーン奏法について」	「サクソフォンの奏法について」	「オーボエ実技（アンサンブル）について」	「声楽」	「フルート演奏法について」	「オペラ曲解釈・演奏法と各役柄について」	「ヴァイオリンの奏法と解釈」	「クラリネット演奏法について」	「箏曲の演奏と理論について」	「チェロ音楽について」	「ヴァイオリン奏法について」
エディット・ピヒト・アクセンフェルト	小川 博久	ガロワ・モンブラン	アロイス・バングラー（ドレスデン国立歌劇場管弦楽団）	ジャン・マリ・ロンデックス（ボルドー国立音楽院教授）	インゴ・ゴリツキ（ハノーヴァー音楽大学）	エルンスト・ヘフリガー（ミュンヘン音楽大学）	ウエルナー・トリップ（ウィーン・フィルハーモニー）	ヤン・ポツパー（元カリフォルニア大学音楽学部長）	レオニード・コリガン（ソヴィエト連邦共和国）	アルフレート・プリント（ウィーン・フィルハーモニー）	中能島欣一（芸大名誉教授）	レーヌ・フラシヨール	ミシェル・オークレール（パリ・コンセルヴァトワール）

S 53 ・ 11 ・ 22	S 53 ・ 11 ・ 18	S 53 ・ 11 ・ 18	S 53 ・ 11 ・ 14	S 53 ・ 11 ・ 7	S 53 ・ 10 ・ 25	S 53 ・ 9 ・ 8	S 53 ・ 7 ・ 6	S 53 ・ 6 ・ 23	S 53 ・ 6 ・ 3	S 53 ・ 6 ・ 1	S 53 ・ 5 ・ 30	S 53 ・ 5 ・ 29
「モーツァルトのピアノコンチエルトその他について」	「デューバ奏法について」	「トランペット奏法について」	「クラリネット奏法について」	「オルガンの現代作品の演奏について」	「スカルラッティのチェンバロ作品について」	「オペラ・メイクアップの概論と実習」	「現代の音楽及びその奏法」	「トランペット奏法について」	「クラリネット奏法について」	「ヴァイオリン奏法について」	「教育実習について」	「モーツァルトの時計の為の作品について」
カール・エンゲル（ハノーヴァー国立音楽大学）	ジョン・ジェンキンス（イギリス・フィルハーモニア管弦楽団）	ジョン・ウオーレス（イギリス・フィルハーモニア管弦楽団）	カール・ライスター（ベルリン・フィルハーモニー）	ウエルナー・ヤコブ（シュトゥットガルト音楽大学）	橋本 栄治	中村 たつ（劇団 俳優座）	ギイ・ドゥプリュ（パリ音楽院）	ルードヴィヒ・ギュトラール（ドレスデン・フィルハーモニー）	アンソニー・ジョリオッティ（フライデルフィア管弦楽団）	アイザック・スターン	小原 光一	ハンス・ハーゼルベック（ウィーン音楽院教授）

S 54・11・26	「指揮について」	モーション・アッモン（北ドイツ放送交響楽団）
S 54・11・22	「現代ハーブシコード奏法について」	ジョージ・マルコム（ウェストミンスター寺院合唱長）
S 54・11・16	ピアノを含む室内楽	ヘルムート・バルト（フライブルク大学）
S 54・11・1	「エストニアアンサンブルの民族音楽の演奏」	エストニアアンサンブル十八名
S 54・10・19	「打楽器の即興演奏について」	テリヘン（ベルリン・フィル）
S 54・7・6	「中国の音楽事情について」	溜 詩 昆
S 54・7・3	打 楽 器	ロランド・コロロフ（ニューヨーク・フィルハーモニック）
S 54・6・19	「カナダの現代音楽について」	ハリー・ソマーズ
S 54・6・19	「モーツァルトクラリネット五重奏曲の演奏と解釈」	ヨナ・エトリンガー（イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団）
S 54・4・18	指 揮	矢崎彦太郎
S 54・4・17	「バッハ・ヘンデル・ハイドン・モーツァルト」	E・ヘフリガー（ミュンヘン高等音楽院）
S 54・2・20	「ロシア歌曲とオペラ」	ドルリアーク夫人（ソヴィエト国立チャイコフスキー記念モスクワ音楽院）
S 54・2・10	「ニューミュージック（ジャズ等）におけるインプロヴィゼーションとアンサンブルについて」	秋吉敏子（ピアノ演奏家） ルー・タバキン（アルト・サクソフーン）

S 54・11・27	「弦楽四重奏法について」	ギュンター・ピヒラー ル・ハルト・シュルツ ティン・エルベ ン・ベルク弦楽四重奏団
S 54・11・27	「音楽記号学入門」	ニコラ・リエヴェ（パリ大学）
S 54・12・3	「フランスオルガン古典音楽の演奏法について」	レイモンド・グーヴェリー（モントリオール音楽院）
S 55・4・23	「吹奏楽演奏法」	デニス・ウィック（ロンドン交響楽団）
S 55・5・13	「音楽教育文献探索法」	斎藤 博（武蔵野音楽大学図書館）
S 55・5・13	「ヨーロッパ指揮界について ほか」	ダニエル・バレンボイム
S 55・5・14	「弦楽合奏 指揮及び公演」	ヴィクター・フェルドブリル（元外国人客員教授）
S 55・5・30	「音楽教師とその教養」	関間豊吉（東京都教育庁指導部指導主事）
S 55・6・12	「学長の学内公開特別公演」	山本正男
S 55・6・13	「創造的歌唱」	ヤン・ポッパ（元カリフォルニア大学音楽学部長）
S 55・7・1	「フランス管楽器界の歩み及びその傾向」	ユリス・ドレクリューズ（元パリ・コンセルヴァトワール教授）
S 55・9・23	「オペラ芸術の過去・現在・未来」	マルセル・ブラーヴィ（ウイーン国立劇場文芸部長）
S 55・9・25	「メイクアップの基礎と実際」	小笠原良智（俳優座）

S 56・5・11	S 56・4・14	S 56・4・13	S 56・4・6	S 55・12・4	S 55・11・14	S 55・11・12	S 55・11・11	S 55・11・10	S 55・11・4	S 55・10・27	S 55・10・14
「指揮法及びカナダの音楽事情について」	「バッハの音楽について」	「バッハの音楽について」	「コントラバスの独奏レパートリーの奏法について」	「マリア・イヴオーギュン女史の発声法について」	「ピアノ公開レッスン（伴奏理論）」	「合奏における練習法について」	「H・ヴォルフとR・シュトラウスの歌曲の唱法・伴奏法」	「マックス・レーガーの演奏について」	「H・ヴォルフとR・シュトラウスの歌曲の唱法・伴奏法」	「メイクアップの基礎と実際」	「ヴァイオリン奏法について」
ヴィクター・フェルドブリル（トロント交響楽団指揮者）	H・ヴィンシャーマン（デトモルト音楽大学教授）	H・ヴィンシャーマン（デトモルト音楽大学教授）	L・シュトライヒャー（ウィーン・アカデミー教授）	ミチ・ド・コーヴァ	コンラート・リヒター（シユトウツトガルト音楽大学教授）	ジェームス・バダール（前武蔵野音楽大学招聘教授）	コンラート・リヒター（シユトウツトガルト音楽大学教授）	ウエルナー・ヤコブ（シユトウツトガルト音楽大学教授）	コンラート・リヒター（シユトウツトガルト音楽大学教授）	小笠原良智（俳優座）	ヴォルフガング・ミュラー（シユトウツトガルト音楽大学教授）

S 58・7・1	S 58・6・28	S 58・6・24	S 58・6・13	S 58・5・20	S 58・5・18	S 58・5・17	S 58・5・17	S 58・4・12	S 56・9・16	S 56・6・19	S 56・6・19	S 56・5・18
「メサイアの発音について」	「コントラバス演奏法」	「ピアノの構造及び調律について」	「オペラ実技指導」	「中等教育の現状の問題」	「北インド（声楽）の技法について」	「音楽分析の方法」	「スペルガーの未発表の作品の演奏と講義」（コントラバス）	「オーボエ奏法と室内楽」	「フランス音楽について」	「バロック時代の即興演奏について」	「オペラを中心に観たドレスデン音楽史」	「室内楽の中のクラリネット」
フィリップ・イゲ（ハワイ大学教授）	ゲリー・カー	野末 智（芸大非常勤講師）	ヤン・ポッパ（特別招聘実技指導）	安藤定則（都立教育研究所主任指導主事）	ラクシュミ・テワリ（ウェスレヤン大学助教授）	エルハルト・カルコシユカ（シユトウツトガルト音楽大学教授）	クラウス・トンブラー（ベールリン国立歌劇場首席奏者）	ヴァンゴ・グリツキ（ハノーヴァー音楽大学）	ピエール・バルビゼ（パリ国立音楽院教授）	ヨハネス・ヴァルター（ドレスデン国立歌劇場オーケストラ首席フルート奏者）	ホルスト・ゼーガー（ドレスデン国立歌劇場総監督）	ヴォルフガング・テシュナ（バンバルク交響楽団首席クラリネット奏者）

S 59・6・27	S 59・6・5	S 59・5・25	S 59・5・25	S 59・5・21	S 59・5・16	S 58・12・7	S 58・11・30	S 58・11・17	S 58・11・17	S 58・11・1	S 58・10・17	S 58・10・14	S 58・7・4
「管打楽器合奏指導について」	「電子楽器オンド・マルトノの楽器と作品について」	「ヴァイオリン実技特別講座」	「教育行政の動向と生徒指導の課題」	「現代サクソフフォン演奏法」	「バッハの演奏法」	「管楽器奏者のための生理学」	「ピアノ演奏法実習」	「現代オーボエ奏法について」	「現代トロンボーン演奏法について」	「コンピューター音楽について」	「近代フランスフルート奏法について」	「室内楽について」	「現代のクラリネット作品及びその奏法」
フレデリック・フェネル	ジャンヌ・ロリオとオンド・マルトノ六重奏団	シュロモ・ミンツ	安藤定則(都立教育研究所)	ヨジン・ルツソー(インディアナ大学教授)	エディット・ピヒト・アクセンフェルト(フライブルク大学)	根本俊男(神奈川歯科大学教授)	クラウス・シルデ(ミュンヘン音楽大学教授)	レイ・ステイル(シカゴ交響楽団首席奏者)	ブラジミル・スローカー(ケルン音楽アカデミー教授)	ダヴィッド・キーン(カナダ州立大学助教授)	アラン・マリオン(パリ・コンセルヴァトワール教授)	ヘルムート・バルド(フライブルク音楽大学)	チャールズ・ナイディヒ

S 59・12・3	S 59・11・27	S 59・11・21	S 59・11・15	S 59・11・9	S 59・11・1	S 59・10・26	S 59・10・25	S 59・10・16	S 59・9・18	S 59・9・17	S 59・9・3	S 59・6・29
「歌曲(ドイツリート)伴奏」	「現代トランペット演奏法について」	「ピアノ調律実技ほか」	「現代フルート演奏法」	「ハープ特別講座」	「オーボエ現代音楽の演奏法」	「フルート奏法について」	「ピアノ演奏法」	「ピアノ演奏法」	「現代オルガン曲の作曲法とその作品について」	「室内楽特別講座」	「ヴィオラ奏法について」	「メサイアの発音について」
コンラート・リヒター(シユトウツトガルト音楽大学教授)	ヴィンセント・チュヴィツツ(ノースウエスタン大学教授)	野末 智(芸大非常勤講師)	クリスチャン・ラルデ(パリ音楽院教授)	マリ・クレール・ジャメ(パリ音楽院教授)	ジェームズ・オストリニツク(ジョンズ・ホプキンス大学木管教授)	アンドラーシュ・アドリヤン(バイエルン放送交響楽団首席奏者)	クラウス・ヘルヴィヒ(ベルリン国立音楽大学教授)	ベラ・シキ(シンシナティ音楽大学教授)	グザビエ・グラス(トゥールーズ音楽院教授)	アレクサンダー・シュナイダー(元ブダペスト弦楽四重奏団)	ライナー・モーク(元ベルリン・フィルハーモニー首席奏者)	フィリップ・イゲ(ハワイ大学教授)

S 60・7・5	S 60・6・25	S 60・6・25	S 60・6・19	S 60・6・7	S 60・5・31	S 60・5・24	S 60・5・13	S 60・5・8	S 60・4・17	S 60・2・25	S 60・1・16	S 59・12・12	S 59・12・5
「フルトヴェングラーとその音楽」	「英国の現代音楽について」	「オーケストラ奏法―コンサートマスターの役割について」	「ヴァイオリン公開レッスン」	「バッハの組曲に関して」	「教育行政の動向と生徒指導の課題」	「現代音楽における管弦楽奏法」	「ピアノ公開レッスン」	「声楽演奏に関するデッサン」	「オルガンの演奏技術について」	「ワヤンクリ(ジャワの影絵芝居)とガムラン演奏」	「ヨーロッパ民族楽器の諸相」	「歯と管楽器について」	「指揮公開レッスン」
ハンス・ベーター・シュミッツ(元ベルリン・フィルハーモニー首席フルート奏者)	ナイジェル・オズボーン	ライナー・キュッヒル(ウイン・フィルハーモニー・コンサートマスター)	アイザック・スターン	エディット・ピヒト・アクセンフェルト(元フライブルク音楽大学教授)	大木勝之進(東京都立教育研究所)	チャールズ・ナイディヒ(ジュリアード音楽院)	イエルク・デムス	アーリン・オージェ	ジェニファー・ペイト	アノム・ストロ(人形遣い)とサプトノほか	エーリヒ・シュトゥクマン	根本俊男(神奈川大学教授)	ジャン・フルネ

S 61・4・28	S 60・12・6	S 60・12・3	S 60・11・28	S 60・11・26	S 60・11・25	S 60・11・20	S 60・11・5	S 60・10・30	S 60・10・24	S 60・10・22	S 60・10・21	S 60・10・18	S 60・10・11
「スペイン歌曲を中心にした声楽について」	「指揮法講座」	「バッハと完成音楽の概念」	「トロンボーンの演奏」	「バッハの管弦楽組曲(第二番)の解釈について」	「宗教音楽の指導」	「整音について」	「チェロ奏法について」	「ハープの奏法について」	「フランスフルート音楽の解釈」	「音楽における疾風怒濤」	「古典及びロマン派のピアノ組曲の解釈について」	「メサイアの発音について」	「埋もれたヴァイオリン曲の発掘等について講演と演奏」
ビクトリア・デ・ロス・アンヘレス	ジャン・フルネ	クリストフ・ヴォルフ(ハーヴァード大学教授)	ミシェル・ベツケ(パリ・コンセルヴァトワール教授)	ヨハネス・ワルター(ドレスデン音楽大学教授)	ローレ・フィッシャー	野末 智(芸大非常勤講師)	ボリス・ペルガメンシコフ(ケルン音楽大学教授)	ユッタ・ソフ(ドレスデン国立歌劇場首席奏者)	マクサンス・ラリユー(ジュネーヴ音楽大学教授)	ルートヴィヒ・フィンシャ(ハイデルベルク大学教授)	マリア・クルチョ	フィリップ・イゲ(本学外人講師)	ガブリエル・バナッド(ニューヨーク・フィルハーモニー)

S 61・10・21	S 61・10・21	S 61・10・17	S 61・10・16	S 61・10・14	S 61・6・19	S 61・6・3	S 61・5・30	S 61・5・30	S 61・5・30	S 61・5・30	S 61・5・10
「ロマン派のピアノ演奏について」	「ドイツ歌曲について」	「ハープの演奏法について」	「学生オーケストラ公開練習」シュベルト 未完成交響曲他	「グスタフ・マーラー無限なるものを求めて」	「オーボエの演奏法について」	「サキソホーンの演奏法について」	「ロマン派のピアノの演奏解釈について」	「フランス ヴァイオリン曲の演奏法について」	「教育行政の動向と音楽教育の課題」	「オーケストラにおける金管楽器の在り方」	「学生オーケストラ公開練習」ドビュッシー・ノクチュルヌほか
クラウス・シルデ（ミュンヘン音楽大学教授）	ハンス・ホッター（ウィーン・アカデミー教授）	マリ・クレール・ジャメ（パリ） コンセルヴァトワール教授	セルジュ・チェリビダツケ	アンリ・ルイ・ド・ラ・グランジュ（グスタフ・マラー音楽図書館長）	オットー・ヴィンター（バンベルク交響楽団首席奏者）	ユージン・ルソー（インディアナ大学教授）	ベラ・シキ（ワシントン大学教授）	ガロワ・モンブラン（元パリ音楽院院長）	丸山忠璋（東京都教育庁指導主事）	稲川栄一（ケルン音楽大学教授）	ジャン・フルネ

S 62・4・13	S 61・12・12	S 61・12・3	S 61・12・1	S 61・11・29	S 61・11・28	S 61・11・26	S 61・11・25	S 61・11・10	S 61・10・31	S 61・10・27	S 61・10・22
「ロマン派のピアノ音楽について」	「ヴィオラ奏法について」	「フルート演奏法について」	「歌曲伴奏法について」	「アメリカのフルート現代演奏法について」	「フランスの歌曲について」	「現代ピアノの調律について」	「チェロの演奏法について」	「フランス音楽について」	「トランペットの現代フランス演奏法」	「オーボエ音楽一般について」	「ヴィオラの奏法について」
エンリコ・バレンボイム	ライナー・モーク（ケルン音楽大学教授）	アリフェニグセン・タウト（トロツシンゲン音楽大学教授）	コンラート・リヒター（シエウトットガルト音楽大学教授）	ハーヴィ・ソルバーガー（インディアナ大学教授）	エオディット・セリグ（ルーアン コンセルヴァトワール教授）	野末 智（芸大非常勤講師）	ダヴィッド・ゲリンガス	ヴラード・ペルルミュテール（元パリ音楽院教授）	ギ・トゥーヴロン（リヨン国立音楽院教授）	シェレンベルガー（ベルリンフィルハーモニー首席奏者）	ルドルフ・シュートレング（元ウィーン・フィルハーモニー首席奏者）

S 62 ・ 6 ・ 23	S 62 ・ 6 ・ 23	S 62 ・ 6 ・ 23	S 62 ・ 6 ・ 8	S 62 ・ 6 ・ 4	S 62 ・ 6 ・ 4	S 62 ・ 6 ・ 4	S 62 ・ 6 ・ 4	S 62 ・ 6 ・ 4	S 62 ・ 5 ・ 29	S 62 ・ 5 ・ 26	S 62 ・ 5 ・ 15
「オルガン演奏技法の実 際について」	「クラリネット奏法につ いて」	「南インド古典音楽の技 法」	「C・P・E・バッハの チェンバロ音楽につい て」	現代音楽特別講座「二 十世紀の音楽」	「フルート演奏法につ いて」	「ヴァイオリン奏法につ いて」	指揮科公開レッスン	室内楽、弦楽四重奏	「教育行政の動向と音楽 教育の課題」	「ベルカントのイタリア オペラの歌唱法」	「イタリア、フランスの 声楽曲における発声と 解釈」
ピーター・ハーフォード(英 国の代表的オルガニスト)	ミシェル・アリニオン(パ リ・オペラ座ソリスト)	T・R・スプラマニウム(南 インド音楽学校教官 他二 名)	橋本英二(米国シンシナテ イ大学教授)	ポール・ズーコフスキーお よびジュリアード現代音楽 アンサンブル	ジュリアス・ペーカー(ジュ リアード音楽院教授 元ニ ューヨークフィル首席奏者)	ドロシー・ディレイ(ジュ リアード音楽院教授)	スタニスワフ・スクロヴァ チェフスキー	ジュリアード・クワルテッ ト ロバート・マン一行	丸山忠璋(東京都教育庁指 導主事)	カルロ・ベルゴンツィ	エミール・ペルージャ(バリ エール・ノルマル音楽院 教授)

S 62 ・ 11 ・ 24	S 62 ・ 11 ・ 20	S 62 ・ 11 ・ 19	S 62 ・ 11 ・ 14	S 62 ・ 11 ・ 11	S 62 ・ 11 ・ 4	S 62 ・ 11 ・ 2	S 62 ・ 10 ・ 28	S 62 ・ 10 ・ 23	S 62 ・ 10 ・ 14	S 62 ・ 9 ・ 4	S 62 ・ 7 ・ 3
「ドイツ歌曲の表現と発 音法について」	サンサーンス ドビッ シー コシベ シュの 演奏及質疑応答	「リスト、バルトークの 音楽について」	学生オーケストラ特別 公開講座	管打合奏指導実技	「現代ノールウェイ音楽 について(音楽の思想 と転移)」	「オペラの歌唱法につ いて」	「ピアノの整音について」	「ハンガリー フルーツ 音楽の解釈」	「現代フランス音楽」	「都市と文化」ニユーヨ ーク」	「コントラバスのフレン チボウの奏法について」
ウタ・クッター(シュトゥ ットガルト音楽院教授)	リヒャルト・ランベール (ギヤルド・レピュブリケ イ首席奏者)	ペーター・ショイモージュ (フランク・リスト音楽院教 授)	ヘスス・ロペス・コボス (ベルリンドイツオペラ音楽 監督)	ロジェ・フートリリー(バリ コンセルヴァトワール教授)	アルネ・ノルトハイム(現 代作曲家)	マッキンタイヤー(ベルリ ン・ドイツ・オペラ専属歌 手) 他一名	野末 智(ヤマハのピアノ 調律技術者)	ローラント・コヴァーチュ (ブダペスト音楽院教授)	ドミニク・ジャムー(音楽 学者)	近 藤 譲	ストラット・フォード(ロ ンドン王立アカデミー教授)

S 62・12・1	「ロマン派の音楽について」	ヴィレム・ブロンズ（阿姆斯特ダム スヴェーリク音楽院教授）
S 63・2・19	「ドイツ歌曲の唱法と解釈」	ミルドレッド・ミラー

公開講座

昭和五十八年から昭和六十二年までの音楽学部公開講座は次のとおり。

年 度	講 座 名	講 座 内 容	講 師
昭和五十八年	打楽器教室	リズム表現の原点を求めて	有賀誠門 森美智子
昭和五十九年	木管楽器教室	木管楽器の歴史及び楽器論、ならびに演奏法	青井昌国 小島耕治 岡崎勇一 大室光三 守山
昭和六十年	金管楽器教室	金管楽器の歴史及び楽器論、ならびに演奏法	中山富士雄 大石清三 守山光清 伊藤幸雄 永浜
昭和六十一年	合唱教室	発声法並びに合唱の歌い方	大町陽一郎 小谷彩子 三林輝夫 小林
昭和六十二年	指揮法教室	指揮の基本原理、基礎技法の講義と実習	遠藤雅古 松尾葉子 小池ちとせ

昭和五十八年度の「打楽器教室」を担当した有賀・森両氏による感想が『学報』に掲載されている。

昭和五十八年度公開講座（音楽学部）を終えて
音楽学部 助教授 有賀 誠 門

「私はリズムが悪い」と言ったり、思ったりしている人達が割合多い。私達は日常生活の中で何気なく動いているが、その動きのリズム運動は非常に限定されたものである。人間の体は本来 Swing する様に出来ている。なぜなら体はまるい、円運動をする様に設計されているからである。それを知って体を振動させることにより、より新しい感覚を身に付けることが出来る。「体を動かす」ことこそリズム運動の原点である。この原点をみつけることによって、生き生きとした響きを響かせ、自からのリズムを創り出すことが出来る。音楽は人間の心を表現するものであり、それぞれの国の人々が、それぞれ特有の音楽を創り出し、それはそこでの生活に根ざしている。その音楽を聞けば、その国の人達の精神構造も分かる。私はあらゆる現象を音楽として感覚することが出来ると考え、その為には健全な肉体と覚醒した意識作用が運動出来る様に訓練されているべきである。表面的なことだけに注意がいくと、肉体が固定してしまい、内なるエネルギーもやせ細ってしまう。純粹にして強力なエネルギーを燃やし続けるには、体を内側から解放してやることである。リズムを作り出すのは己自身である訳であるから、まず自分を知ることです。それは、自分の体の動きの原理を自から体感することである。以上が私の基本理念で、これに基づいて講座を展開させていった。

一般的に音楽を演奏する時の様々な動きは、部分的な動きになりがちであって、全体的ではない。体はどの様な機能をもっているか、日常の動作「座る」「立つ」が起すリズム運動から導入した。この

動作を繰返すことで、普段使われていない筋肉が働かせられ、筋肉運動の重要性を十分認識出来た様である。さらに様々なハンディをつけた動きをすることで、内なるエネルギーの欠如を知ることになった。自分の体を解放するには、強い意志と集中力を必要とすることになる。手首の動き、肘の動き、肩の動き、腕の動き、足首の動き、膝の動き、腰の動き、胴の動きを試み、動きの表現へと繋げる。動きには、必ず支点があることと、全ての動きは筋肉運動であることを徹底させる。次に人間の中に自然を感じさせることから、様々な動物の動きや心の動きを表現してみる。地球が楽器ならば、人間は指である。地球が響^マ鳴^マしている。人間も響^マ鳴^マする。響^マ鳴^マするもの同志の間から出る音は、正に輝くばかりの大きな響きである。この考えから、より自分を響^マ鳴^マ体にするべく声の発散を行う。殆んどの人達は、人間が二本足で立つ様になったことにより、動物としての本来の動きが損なわれていることを感じた様である。日頃、殆んど行わない瞬時の運動、空手、足の蹴り等を行うことで「氣」の呼吸、瞬時の「間」を覚えさせる。動きがゼロになる点を感じさせる。筋肉の緊張、緩み、持続からリズムを創り出し、時の流れ（一定のテンポ）を感じる事が出来る。常に動きに集中することを試みる。

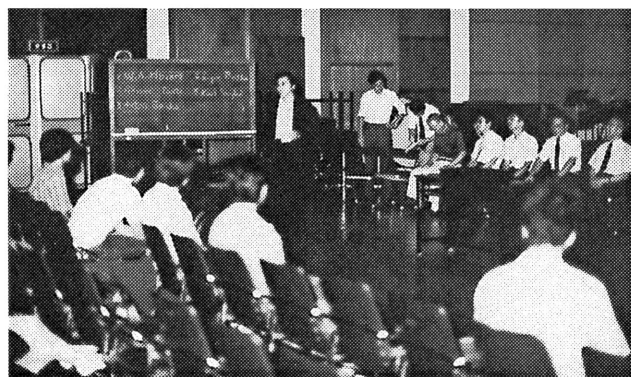
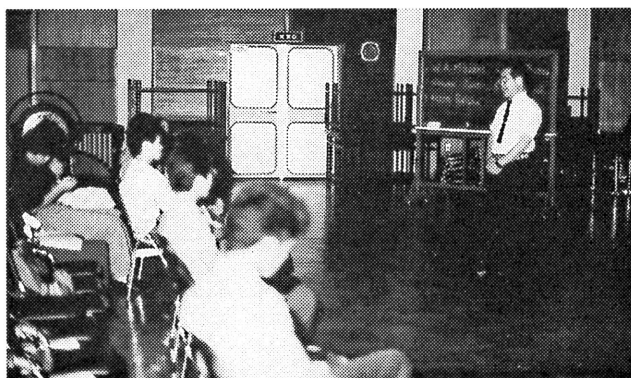
一般の動き、歩く運動を正しく動かすことから裏拍を感じさせ、マーチ、ロック、ジャズ等の足の音楽へのアプローチを試みる。なかなか難しかった様である。これをさらに進め、変拍子へと動きをさせてみたが、いかに裏拍を感じていないか分った。先ず、一、二、三……と数えるのが乗らないのである。そこで第一日目にはサンバのリズム、二日目に入り簡単な打楽器アンサンブルとリズム遊びを

やってみた。各パートをダブらせる等して全員が参加。なかなか思う様に手が動かなかった様であるが、各パートに助手が付き、適切なアドバイスで次第にまとまっていった。膨大な数にのぼる様々な楽器にこれだけ思う存分触れることが出来たことは、受講生にとって大変嬉しかった様である。足を使う、手を振るなどで、動きのかなめを意識させ、手の振りから様々なリズム図形を表現させ、動きが空間に止る、離れるの難しさを知った様である。日常の会話も口の筋肉運動である訳で、よりリズムカルに表現する方法を試みる。演奏面では鍵盤打楽器を使つての全員による即興演奏、楽しい軽快なサンバ、太鼓類によるアンサンブル等を取り上げた。打楽器の解説も分かり易く説明、興味をもつて聞いて貰えた。アシスタントの学生諸君のアンサンブル、森講師、小生、参加者を加えての演奏も行い、演奏面での私の考えを披露、締括りとして学校にある殆んど打楽器を指揮者なしで五十人の人達が、それぞれ好きな楽器を通して音楽した訳であるが、その壮大な響きと、喜々と楽器と戯れる姿をみてリズムの為せる技に心から感動した。三日間、その時々の受講生の反応と進み具合をみながら進めた訳であるが、体の動きから心の動きへと意識するアプローチは成功した様である。森講師始め、協力してくれた学生諸君の働きに心から感謝したい。また、事務局始め多くの方々の御協力と御助力に対してここに厚くお礼申し上げます。

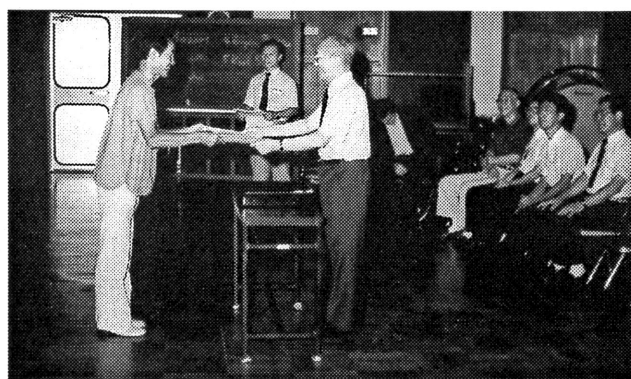
音楽学部 講師(非) 森 美智子
東京芸術大学に於いて、打楽器公開講座が今回初めて行なわれた。



昭和60年度 公開講座



金管楽器教室 8月6日(火)～8日(木)



八月八日から十日までの三日間、会場は第六ホールであった。

受講者は、幼稚園の先生、小・中学校の先生、作曲家、学生、公務員、音楽大学卒業後現在プロ活動をしている人々まで、実に幅広い層であった。また、人数も五十名程と想像以上の数だったのには驚いた。素人の人々の中には、自分は生れつきリズム感が悪く、テンポ音痴だと思い込み、何とかしようとワラをも掴む気持で参加した人達も多かったようだ。そういう人々にもごく分かり易い方法、たとえば日常生活の中で誰でもが何気なく動いている、その動きこそリズム運動の原点であるという事を指導し、根本の発想をよく理解させてスウィングさせ、ごく自然に導入して行く……。どんな人でも抵抗なく付いて行けたと思う。

打楽器を演奏する……それは先ず体の機能を良く知り、動きを意識し、上向き運動、各部分の緊張、緩み等自由にコントロール出来、必要な筋肉を徹底的に鍛えなければならぬ。三日間五十名程が有賀先生を中心に見事に一体となつてこれをやった。会場は熱気に満ち、十代から五十九歳まで年齢差のある人達が一生懸命やつてゐる姿に打たれた。

こうして基本を整えながら、第六ホール一杯に受講生達が並んで大きな輪を作り、その輪の中にティンパニー、コンガ、ボンゴ、マリンバ、バスドラム、小太鼓、ヴィブラフォーン、チャイム等あらゆる打楽器を数多く置いて演奏させた。全員で大合奏が繰広げられ、皆んな楽しく乗りまくった。この講習会で始めて打楽器をやった人達も皆んな一緒に立派に演奏しているではないか！ 今きくと受講者達は皆、普段触ることさえ出来ないような珍らしい楽器類を自由

に使い、思う存分音を出すことが出来た喜びを心の中に持ちつつ、この三日間で得たものを自分なりに最大限發揮しているに違いない。

〔横組〕『東京芸術大学学報』二二六号 昭和五十八年十月十五日 五～六頁

大学設置直後は、文部省あるいは教育委員会などの要請により講習会が行われていた。学内の資料には以下の「現職教育講座講習会」「新音楽教育講習会」「教育指導者講習会」がある。

現職教育講座講習会

教育職員免許法および同法施工法に基づき、現職教員の資質と資格の向上をはかる、という主旨のもと現職教育講座が開催されていた。『学報』第二十号より関連部分を掲載する。

昭和二十九年年度現職教育講座開催について

昭和二十九年年度現職教育講座を次の要領により開設することになった。

現職教育講座開設要領

1、趣 旨 教育職員免許法および同法施工法に基き、現職教員の資質と資格の向上をはかる。

2、開 設 者 東京芸術大学

3、開設場所 東京芸術大学美術学部

〃 音楽学部

4、開設科目 美術学部へ図画、工作

音楽学部へ音楽

5、受講者資格 原則として国立または、公立の現職高等学校教員

に限る。

6、開設期日（全日制講習）

音楽は八月十八日より八月二十六日まで

7、講師および教科目

◇音楽学部

池内友次郎 管弦楽法

下総 寛三 対位法

石桁真礼生 楽式論

浅野千鶴子

城多又兵衛 声 楽

矢田部勤吉

福井 直俊 ピアノ

安川加寿子

山本 正人 管打楽器

小沢 弘 弦 楽 器

井上 武雄

長谷川良夫 和 声 学

井上 武士 教材研究

（補導課補導係）

（横組）『東京芸術大学学報』第二十号 昭和二十九年七月二十日 八～九頁

新音楽教育講習会

昭和二十四年十一月十一日、十二日の両日、新音楽教育講習会が開かれた。概要については申込書を掲載する。

新音楽教育講習會

終戦後四年にして我々はいろいろ困難な事情の下にありながら、漸く本格的な音楽教育をすることが出来るようになりました。

この機会に斯道の先達たる諸先生に研究の御発表を願ひ且受講者各位の御意見を拜聴することは、極めて意義深いことと信じます。

茲において教育音楽協會並に東京藝術大学音楽学部同声會は十一月十一日（金）十二日（土）の両日を期して新音楽教育講習會を開催することになりました。

要 項

一、期 日 昭和二十四年十一月十一日（金）十二日（土）の二日間（午前九時）

一、會 場 東京藝術大学音楽学部奏樂堂（元東京音楽學校奏樂堂）

堂

一、講習内容

1. 音楽の單元学習 文部省圖書監修官 近森一重氏

2. 讀譜の指導 學習院教授 小出浩平氏

3. 簡易樂器の教え方 船橋高等學校教官 上田友龜氏

4. 音樂理論の指導 東京藝術大學音樂學部 下總皖一氏

5. 音樂創作の指導 東京高等師範附中教官 井上武士氏

6. 音樂の鑑賞教育 江古田小學校長 中野義見氏

7. 合唱の實地指導 東京藝術大學音樂學部 城多又兵衛氏

（合唱曲集は當日會場に用意しておきます）

8. 講習會員の意見發表（一人約十分御希望の方は至急御申込

み下さい)

(「芸大初期プログラム」)

一、會 費 一金百五十圓 但同声會員、教育音楽協會員に限り百圓とし

ます。

教育音楽協會員の方は會員番号を申込書にお書き下さい。御申込みは當日會場でも受付ます。會場の収容力に限度がありますからなるべく早く御申込み下さい。

一、申込所 東京都台東区上野公園 東京藝術大学音楽(学)部同声會

主 催 東京藝術大学音楽学部同声會

教 育 音 樂 協 會

後 援 文 部 省

東京藝術大学音楽学部

協 賛 日本樂器製造株式會社

日本管樂器株式會社

音 樂 之 友 社

.....切 取 線.....

受講申込書

現住所

勤務先

氏名

①

私事金

圓也を添え、新教育講習會に受講の申込を致します

昭和二十四年 月 日

東京藝術大学音楽(学)部同声會 御中
教 育 音 樂 協 會

教育指導者講習会 (IFEI The Institute For Educational Leadership)

教育指導者講習會は一九四八年七月に公布された教育委員會法に基づき、教育長などに対する専門教育を行う目的で、文部省主催・総司令部民間情報局賛助のもとに開催された教育長等講習に始まる。

戦後の日本に新しい教育を徹底させる主旨のもと、教育長・指導主事・教員養成関係大学教官・大学行政官・青少年指導者などをおもな対象者として行われた講習會で、一九四八年十月から一九五二年十二月まで九期にわたって大学などを会場として全国各地で開催された『教育学大辞典』(第一巻より)。本学で行われたものは第九期にあたり、昭和二十七年十月六日から十一月十五日まで行われた。報告書『音楽教育法研究―音楽教育法研究集会報告書』が東京藝術大学音楽学部編として昭和二十八年二月二十日に刊行されている。「報告書」より講師名、参加者名、音楽科指導者講習會日誌と、研究報告の目次を掲載する。

講 師 名 (五十音順)

講座担当主事

東京芸術大学教授 下総寛三(皖一)

鈴木 鎮 一 (松本音楽院長)

二宮 徳馬 (文部省)

花 村 大 (文部省事務官)

日高第四郎 (前文部次官)

牧 定 忠 (NHK音楽資料課長)

真 篠 将 (文部省事務官)

宮坂哲文（御茶の水大学助教）

諸井三郎（文部省社会教育課研究指導員）

東京芸術大学音楽学部関係教官

教授 颯田 琴次

教授 下総 寛三

（皖一）

教授 城多又兵衛

教授 田尾 一一

教授 福井 直俊

教授 矢田部 勤吉

助教授 平原 寿恵子

助教授 長谷川 良夫

助教授 黒沢 愛子

助教授 山本 正人

講師 井上 武士

講師 長坂 好子

講師 野村 良雄

講師 酒井 弘

講師 渡辺 暁雄

参加者名簿（研究グループ別）

大学グループ

駒ヶ嶺大三（北星学園女子短期大学）

葛西満郎（弘前大学教育学部）

斎藤次郎（山形大学教育学部）

後藤重樹（群馬大学教育学部）

森田百合子（千葉大学教育学部）

安井万治（岐阜大学教育学部）

鈴木 寛（三重大学教育学部）

阿保 寛（大阪学芸大学）

糸賀英憲（広島大学教育学部）

小田切正太郎（山口大学教育学部光分校）

後藤忠雄（福岡学芸大学）

末次定義（熊本大学教育学部）

倉敷知恵子（宮崎大学教育学部）

林 幸光（鹿児島大学教育学部）

中学・高校グループ

佐々木竹治（秋田県教育委員会）

新島 弘（東京教育大学附属高等学校）

山本 力（上野学園短期大学）

三室戸文光（東邦音楽短期大学）

桜井武義（千葉県教育委員会）

石井信夫（栃木県宇都宮高等学校）

橋本節子（群馬県高崎高等学校）

木村忠雄（大阪府教育委員会）

内藤時光（広島県教育委員会）

小学校グループ

土居 敬（宮城県教育委員会）

岡村 勝 (東京学芸大学)

篠原正敏 (新潟大学教育学部高田分校)

松本仁三 (栃木県教育委員会)

松井美次 (山梨県教育委員会)

池田 浩 (埼玉大学教育学部)

平井善次 (京都府教育委員会)

楠本重夫 (和歌山市役所教育部)

新田左武郎 (岡山県教育委員会)

尾形サダ (香川大学学芸学部)

坂口 隆 (福岡県教育委員会)

社会教育グループ

岡山 直 (福岡県教育委員会)

下野 米 (茨城大学教育学部)

坂口五郎 (山梨大学学芸学部)

惣田三四司 (静岡大学教育学部)

高橋恒治 (京都学芸大学)

松田新治 (徳島大学学芸学部)

後藤正夫 (高知大学教育学部)

山口 薫 (長崎大学学芸学部)

10月6日 前 開講式 挨拶 東京芸術大学学長 上野直昭

東京芸術大学音楽学部長 加藤成之
文部省大学学術局長代理 花井事務官

参加者 答辞 鹿児島大学 林 幸光

後 オリエンテーション

7日 前 講演「指導者講習と教員養成の問題」

〔文部省事務官 上野芳太郎〕

後 午前中の講演に基いて研究討議 (内容は別項①)

8日 前 講演「音楽教育と教育原理」

〔東京芸大教授 田尾 一二〕

後 音楽教育原理に就いて研究討議 (内容は別項②)

9日 前 芸大オーケストラ練習見学

独逸鎮魂曲―ブラームス

指揮 金子 登 クルト・ヴェス

後 同上合唱練習見学 同上

10日 前 個人特別研究発表「盲教育」

〔茨城大学 下野 米〕

〃「東北地方の民謡について」

〔秋田教育委員会 佐々木竹治〕

後 今週の研究テーマを中心に研究討議 (内容は別項③)

11日 個人研修 各個人毎に研究の整理、調査、見学を行う

10月13日 前 講演「小学校音楽科指導要領について」

〔文部省事務官 真篠 将〕

音楽科指導者講習会日誌
自昭和27年10月6日 至昭和27年11月15日 (六週間)
於東京芸術大学音楽学部
講座担当主事 東京芸大教授 下総寛三 (皖一)

後 同上 質疑応答を行いつつ

- 14日 前 同上
- 後 Kwalwasser-Dykma の音楽才能テストをレコードに依り聴く
〔説明 真篠〕
- 15日 前 全国中学校音楽担当教員の現況
〔宮城教育委員会 土居 敬〕
- 小学校に於ける音楽教育上の解決すべき諸問題
〔栃木教育委員会 松本仁三〕
- フルセットに就いて〔大阪芸芸大学 阿保 寛〕
- 後 東京大学「音響学会」聴講
LPレコードとテープコーダーに就いて
〔須子信一〕
〔井深 大〕
- 16日 前 講演「ヨーロッパの音楽の現状に就いて」
米国視察談
〔音楽評論家 野村良雄〕
- 後 実地指導 台東区黒門小学校見学
- 17日 前 講演「小学校音楽科学習指導要領の編集について」
〔東京都指導主事 浜野政雄〕
- 後 盲学校参観（参観記は別項④）
- 18日 個人研修
- 10月20日 前 学習指導要領（中学校）に就いて
〔文部省事務官 花村 大〕
- 後 座談会
- 21日 前 学習指導要領（高等学校）に就いて
〔文部省事務官 花村 大〕
- 後 Seashore の音楽才能テストレコードを聴く
説明〔東京芸芸大教授 颯田琴次〕
- 22日 前 実践報告「農村の子供の音楽性について」
〔山形大学 斎藤次郎〕
- 中学高校の諸問題に就き研究討議
- 後 高等学校音楽科必修に就いて討議、東京に於ける促進運動に就いて
説明〔東京都立白鷗高校 橋本清司〕
- 23日 前 発声に就いて、声楽科諸教官と懇談会
〔下総、城多、颯田、矢田部、長坂、酒井、平原、田尾の諸講師〕
- 後 グループ別研究討議
- 24日 前 東京教育大学附属中学校参観
- 後 東京都立駒場高校参観
- 25日 個人研修
- 10月27日 前 講演「教育改革の大勢と芸術教育」
〔前文部次官 日高第四郎〕
- 後 グループ別、研究討議
- 28日 後 グループ別、研究討議、終了後キングレコード吹込所見学
- 29日 前 講演「才能教育に就いて」
〔鈴木鎮一〕
- 後 グループ別、研究討議
- 30日 前 講演「純調律に就いて」
〔東京芸芸大助教授 長谷川良夫〕

十一時よりグループ別、研究討議
後 記念撮影、芸大教官をかこむ座談会

〔矢田部、福井、秋元、黒沢、山本、長谷川、下総
諸教官出席〕

31日 前 講演「日本の旋律の和声に就いて」

〔東京芸大教授 下総皖二〕

後 宮城参観

11月1日 個人研修

4日 前 講演「音楽と生活指導に就いて」

〔文部省事務官 二宮徳馬〕

後 グループ別、研究討議

5日 前 講演「特別教育活動に就いて」

〔御茶の水女子大学助教授 宮坂哲文〕

後 グループ別、研究討議

6日 前 グループ別、研究討議

後 レクリエーション出発

7日 レクリエーション

8日 個人研修

11月10日 前 講演「社会教育に於ける音楽教育」

〔文部省事務官 諸井三郎〕

後 グループ別、研究討議

11日 中高グループ研究発表

後 同上

12日 前 講演「放送と音楽教育」

〔NHK音楽資料課長 牧 定忠〕
後 大学グループ研究発表

13日 前 同上 十二時より、講演「指揮法に就いて」

〔東京芸術大学講師 渡辺 暁雄〕

後 大学グループ研究発表

14日 前 同上 十一時五十分より、閉講式、証書授与

後 御茶の水女子大学講堂にて、コルトー氏講演並びに
演奏を聴く。

〔別項①〕 10月7日 研究討議

1. 音楽教育制度

2. 教員養成問題

3. 大学の教職課程

種々討論の結果、二年コース四年コースを問わず、毎学期音楽の
実科を研修する様にしなければ、完全な教員を養成する事は出来な
い、と云う結論に達した。

〔別項②〕 10月8日 研究討議

潜在姿態に関する質疑応答。

日本音楽の将来に就いての下総教授の説明。

音楽教育の基盤となる識見の確立には、此の音楽教育原理のテー
マを今後徹底的に追求すべき事に意見の一致を見た。

〔別項③〕 10月10日 研究討議

現行の教育制度、免許法に関する資料の調査（後藤氏に委任）。

音楽教員の充足状態、実態調査を土居氏に委任。

教育制度の不備な点、特に高校の音楽科必修問題（第三週の課題

にする)。

地方教育の実情(第二週に討議する)。

各地方の教育委員会に是非音楽科指導主事を設置し、計画的な現場の指導法立案を実施せねばならない(意見の一致を見た)。

教員が研究する機会と設備を整えねばならない。それには充分な経費の支出を希望する。

楽器、設備の基準を協議決定して、その完全なる実施を要望する。

下総教授より、日本音楽の基盤としての大衆の音楽的レベルをもつと向上させるべく努力を結集されたい、と発言があつた。

〔別項④〕 10月17日 午後 東京教育大学雑司ヶ谷分校参観。全国盲学校音楽コンクールの校内予選会が行われたが、独唱のコンクールであつた。

課題曲(中学校部) 出船 杉山長谷夫作曲

(高等学校部) 楽に寄す シューベルト作曲

随意曲 出船の港 赤とんぼ 埴生の宿 セレナーデ

カロミオペン あふるる涙 影法師 等

審査員 久本玄智 斎藤松声 外

終つて審査員の批評が行われた。

1. 専攻の者以外からも参加者があつて大変なごやかでよかつた。
2. 二番まで歌詞のあるものは最後までうたつて批評をうけることが望ましい。
3. 音程の不正確なのはいけない。
4. 音量をよく考えられよ。

参観者の感想

1. 盲生は歌う方も聴く方も熱心である。

2. 盲人特有の発声をきけなかつた。

3. 全盲生は一般に口唇の動きが小さく、口の中で舌を動かして発音していたが、半盲生は晴眼者と殆んど変らぬ口唇の動きであつた。

4. 音程感は鋭敏で、音程は正しかつた。

5. タイムは機械の様に正しかつた。

6. 伴奏者は二人であつたが、なかなかすばらしかつた。

7. 発想のつけ方が晴眼者にはない様な大きな声で、高い所を突拍子に歌つていた。その為に曲のバランスが乱れていたのが目だつていた。

最後に一全盲生がピアノ独奏をしてくれた。曲はモーツアルトのソナタ(イ長調)で変奏曲の第四までであつた。順次進行の所やあまりはなれていない和音は演奏容易であつたが音の離れているのは誤奏があつたがそれは致し方あるまい。到底晴眼者の想像も出来ない複雑な、盲人の点字譜を辿つての努力を思うと頭の下るを禁じ得なかつた。

(横組)

〔第九回教育指導者講習研究集録 音楽科教育法〕昭和二十八年二月 六〇二頁